

戦時下におけるエスペランティストの平和実践 ——イシガ・オサムの場合——

神村和美

1. 戦争を生き延びたエスペラント

ロシアのウクライナ侵攻から二年を迎えようとしている2023年10月、中東では、イスラエルとイスラム武装組織ハマスの間で激しい武力衝突が起こり、2024年1月現在も、イスラエルによるパレスチナ・ガザ地区への激しい報復攻撃が続いている。ガザ保健省によると、二万六〇〇〇人を超える死者の多くが女性や子どもであり、イスラエル支持のアメリカをして苦言を呈させるほどの惨状が日々報じられている⁽¹⁾。一方、東アジアでは、ウクライナ侵攻の手を緩めないロシアへ武器供与をし、ミサイル発射実験を頻繁に行う北朝鮮の動向や、米中対立と台湾有事に関する懸念が高まっている。核軍拡を加速させる国々も少なくなく、世界は再び分断と争いの道へと踏み出しつつあるように見える。

長きにわたるパレスチナをめぐる紛争が、民族、宗教、政治、経済などの要因が絡み合った重層的なものであることは周知のとおりである。また、ロシアのウクライナ侵攻の背景も、「ナロード」⁽²⁾や宗教、地政学的な観点から捉える必要があり、今回の侵攻の口実の一つである「ロシア語話者の保護」という大義名分の根底には「ロシア語を話し、ロシア正教を信じる人々が住んでいるところはすべてロシア」という極端な拡大主義が存在しているということ⁽³⁾、さらに、中国が主張する中台統一の必然性の根拠も「民族」と「文化、歴史」に求められていることなどから⁽⁴⁾、共同体構築の根本的要素—民族、国家、言語、宗教—に基づいたイデオロギーに後押しされる他共同体に対する暴力的抑圧は、超国家的かつ脱民族的な共生意識をも生み出しうるグローバル時代においてさえも、発動され続けるという現実を悟らずにはいられない。

殊に言語は、公用語をめぐる激しい対立が生みだされた「言語戦争」の歴史も存在するように⁽⁵⁾、人間の帰属意識と切っても切り離せないファクターの一つであり、なおかつ戦争の正当化に利用されやすい側面を有している。だが、戦争の新世紀に足を踏み入れてしまったといっても過言ではない現在、世界を分断するために利用される言語のあり方を無批判に受け入れるのではなく、言語の背後に生きる人々に思いを馳せ、連帯をもたらす言語の越境性こそを探求する姿勢が必要ではないだろうか。

そして、このような観点に立った時にまず想起したいのは、1859年にロシア領ボ

ーランドでユダヤ人として生を受けたルドヴィーコ・ラザーロ・ザメンホフ (Ludoviko Lazaro Zamenhof, 1859-1917) が考案した言語—エスペラント (希望する人, の意) とその思想「ホモラニスム」(個々の人間はいずれかの国家・民族に属するという常識の枠をこえて, まず人類の一員であるという考え方: 人類人主義) であろう。ザメンホフは, 人類の平和のための言語の可能性—差異や分断を突きつけるにとどまらず, 民族や宗教の違いを超えて人類を結びつける—をエスペラントに託した。彼が生まれ育った街—ビヤリストクは, ロシア人, ユダヤ人, ドイツ人など, 多様な人種が混在していたが, そこには常に民族と言語の対立と暴力があったという。彼は一〇代の頃から, 分断された人間社会をよりよきものに変えるための新しい言語を考案し始める。そして, 1887年に彼が発表したエスペラントは, 何人にとっても公平な国際語を普及させることで民族同士の敵愾心を払拭し, 人類が一つの「家族」のように「心ひとつ」に慈しみあう平和な世界の実現への願いが込められたものであった。⁽⁶⁾

ただし, ロシアのウクライナ侵攻が, 時に旧約聖書のレトリック「兄弟殺し」になぞらえられる様相を顧みると, 言葉によって人類が「家族」のような絆で結ばれる—すなわち平和な共同体としての「家族」—というザメンホフの理想はあまりに単純にすぎる感も否めないであろう。実際にザメンホフの家族も, ナチスのホロコーストにより命を落としている。

だが, 一方で, 彼が生み出したエスペラントは戦争を生き延び, 現在も世界中にエスペランティスト・コミュニティが存在し, エスペラント世界大会, 日本大会, 韓国大会などが毎年各地で開催され, エスペラントとその思想の火が今も世代を超えて受け継がれていることも紛れもない現実である。⁽⁷⁾ これらのことから, 世界が第三次世界大戦の到来ともおぼしきフェーズに突入した現在こそ, エスペラントを理想主義であると否定し退ける前に, 実際に戦時下を生き抜いたエスペランティストにとって, ザメンホフの思想がいかなる形で受け止められていたのかを個々の事例を通して振り返ることが, エスペラントの—延いては言語の—潜在的可能性を探りあてるためにも必要ではないかと思われる。また, 帝国主義的イデオロギーに基づいた他国への侵略戦争という点において, 第二次世界大戦時の日本と現在のロシアが重なるという見方もあることから, 当時の日本のエスペランティストが, どのように自国の侵略戦争に対峙したのかを紐解くことで, 現在のロシアの体制下に生きる人々への想像力も研ぎ澄まされる, ということも考えられるのではないだろうか。

ところで, ウルリッヒ・リンスの *LA DANGERA LINGVO* (栗栖継訳『危険な言語』1975 岩波新書) によると, 世界が第二次世界大戦に翻弄されていった1930年~40年代前半は, 世界中のエスペランティストの大多数が受難の時を強いられていた。当初エスペラント普及運動をリードしていたのはロシアであるが, スターリンがロシ

ア語とロシア文化にヘゲモニー的地位を与え、言語と文化の自由な発展を阻みエスペランティストを迫害することを選択したために、運動は急速に衰退する。また、ヒトラーが政権を奪取したドイツでは、それまで勢力を有していた労働者エスペラント運動は壊滅させられ、一方で中立主義的エスペラント団体（GEA）はナチスに近づき、ファシズムのイデオロギーに呑み込まれていった。

そして、アジアで最も早くエスペラントを採り入れたとされる日本のエスペラント運動も、ファシズムに転がり落ちてゆく国家の支配の下、ドイツのそれとほぼ同様の轍を踏んだ。当時の日本のエスペラント団体のなかでも、帝国主義を相対化する視点を有することで存在感を際立たせていたプロレタリア・エスペラント団体 JPEU（ポエウ）は、高い語学スキルを有したエスペランティストたちの結合の下に立ち上げられ、殊に機関誌 *Kamarado*（カマラード）は非左翼系エスペランティストの間にも浸透するほどの充実した内容を誇っていたが、1932年春から始動した政府当局の激しい弾圧に晒され、34年には壊滅した。しかし、組織消滅後も特高警察の執拗な追跡は続き、かつて JPEU に携わっていたエスペランティストや、ローマ字運動に携わっていた進歩的エスペランティストまでも徹底的な迫害を受け、1938年の「左翼言語運動事件」により、運動は完全に息の根を止められることとなる。

一方、中立主義的エスペラント団体である日本エスペラント学会（JEI）は、戦争への総力体制へと段階的に迎合していった。日中戦争が勃発した1937年、JEI理事の藤沢親雄が「エスペラント報国同盟」を立ち上げ、40年には IEL（Internacia Esperanto-Ligo 国際エスペラント連盟）をも離脱する。ちなみに、満州エスペラント運動に協力した当時の JEI 主事の三宅史平は、IEL 離脱の主な理由を、日本が国防国家建設を目指す新体制に入った以上は国際協調主義の形式は捨てられねばならないということ、日本のエスペラント運動の最終目的が、八紘一宇の世界観による大東亜共栄圏建設のための言語手段としての役割を全うすることにあるためだと述べている⁽⁸⁾。

以上のことから、自国の侵略戦争と「新体制」に対する日本のエスペランティストたちの態度は、抵抗と迎合とに二極化しているように見える。ただし、戦争批判を表明していたエスペランティストのすべてが社会主義を信奉する左翼系立場にあったわけではない。

例えば、イシガ・オサム（石賀修1910-1994）は、政治組織や運動と距離を置きながら、キリスト教信仰を磁場とした平和主義実践のために多彩なエスペラント活動を展開し、兵役拒否という形で個人としての戦争抵抗を試みた。また、エスペラントを通じてスウェーデン語を習得、スウェーデンの作家ラーゲルレーヴ（Selma Ottilia Lovisa Lagerlöf）のキリスト教文学作品を翻訳し、戦時下に彼女の長編小説『エルサレム』第一部を岩波より出版していることでも知られている。

言語と宗教への高い問題意識の上にエスペラントを通じての平和活動を展開し、兵役拒否という形で天皇制国家と対決した彼は、人間にとっての言語と宗教、そして困難な時代にこそ浮かび上がるエスペラントの本質を考察するには欠かせない存在であろう。

そこで本稿では、イシガ・オサムに焦点をあて、彼のエスペラント活動の軌跡を辿ることで戦時を生き延びたエスペラントの可能性を探ることを試みる。次章では、先行研究および本稿の方針について述べてゆくこととする。

2. イシガ・オサムに関する先行研究

イシガの名前は、まず1950年代のキリスト教関係文献（久山康篇『近代日本とキリスト教（大正・昭和篇）』1956 創文社 342頁）に見ることができる。なお、この書物では、イシガは統制の厳しい戦時下に兵役拒否を実行した勇気ある人物として着目されているが、その内容は不正確で、兵役拒否の年も誤っており（実行は1942（昭和一七）年秋とされているが、正しくは1943（昭和一八）年夏）、自首から四ヶ月後に「翻意」しているのにもかかわらず、最後まで非転向を貫いたと記されている。しかし、その一〇年後、イシガ自身による手記「憲兵と兵役拒否の間 神を信じて生きるよろこびについて」（『文藝春秋』〈特集・悔いなき青春〉1966.3）が公表され、彼の兵役拒否とそこからの「翻意」の内実が明らかにされた。

この手記において彼自身が告白した兵役拒否の「翻意」と「転向」は、特にキリスト教関係者の関心を引き、同年に発表された笠原芳光「抵抗と挫折の歴史（下）」（『指』1966.12）では、「これは一人のおとなしいキリスト者の抵抗と挫折の記録である。強い人間の抵抗だけではなく、弱い人間の挫折からも学ぶうらものがあるのではないだろうか。」という問題意識の下、「心境の変化をきたして転向」した「弱い人間」として、イシガは反面教師的に位置付けられている。また、高田哲夫は、イシガの手記に加え、彼の妹・信子と矢内原忠雄とのあいだに交わされた書簡を引きながら彼の兵役拒否を考察し、イシガの行動に「信仰的基盤を見ることが、より大切」であり、日本キリスト教の伝統との関連で彼の行動を捉えるべきだと述べている（高田哲夫『良心的兵役拒否：その原理と実践』新教出版社1967）。

このように、イシガは当初、宗教者としていかに戦争に抵抗したのかという観点から言及されていたが、1974年11月の第61回日本エスペラント大会において、「私がエスペラントに負うもの」と題し、自身の兵役拒否とエスペランティストであることの間わりについて講演をしたことにより、日本のエスペラント界でも知られるようになった。

また、90年代になると、戦争責任というテーマからイシガにアプローチした、きどりのりこ「人類人イシガ・オサムの抵抗—「わたしである」ことを貫いたキリスト

者」(『第二期 戦争責任』第1号 1998.10) が登場する。これは、イシガと交流のあった筆者による詳細なイシガ伝であり、イシガの慈愛に溢れた人間性と、自身の主体性を何よりも重んじた彼の生き様が活写された力作である。

そして、最も新しいと思われる論考には、中丸禎子「無教会の北欧受容 香川鉄蔵、イシガオサムのラーゲルレーヴ受容を中心に」(『北ヨーロッパ研究』第17巻 2021.7) があり、イシガのラーゲルレーヴ受容と絡めて彼の転向問題が取り上げられている。この論考では、イシガの「翻意」の理由の可能性として、エスペラントを通じて翻訳したラーゲルレーヴ作品に潜む、ナチズム思想と共鳴する「血と土」(Blut und Boden) 思想を彼が内面化してしまったため、「論拠の薄弱さ、説得力の不足」を招いたことが挙げられると指摘されている。

一方、エスペ란ティストとしてのイシガに焦点をあてて論じた先行研究には、彼のエスペラント活動を余すことなくまとめた後藤斉の「兵役拒否をこえて—イシガ・オサム」(『人物でたどるエスペラント文化史』JEI 2015) や、エスペラントを帝国主義の植民地支配の道具として利用することを提唱したナショナリスト—北一輝と対比させながら、エスペラントを「平和の言葉」として学び、平和実践として兵役拒否を行動に移したイシガを評価した朝比賀昇「右翼の北一輝と徴兵拒否者石賀修」(『エスペラント La Revuo Orienta』1987.10) などが挙げられる。なお、前掲の後藤は、イシガが自身の氏名をカタカナで表記する点について、彼が言語を社会問題として捉え、ローマ字に関し積極的な発言を行っていたことと関連付けて言及している。

以上、先行研究を振り返ってみたが、戦時統制下で行われたエスペラントを通じた平和活動へのイシガの内なる葛藤や、兵役拒否の現実にぶつかった後のイシガの戦争・平和観の変化と戦後の言論活動については、未だ十分な掘り下げが行われていない。よって本稿では、イシガが戦後公表した1931年から45年までの日記⁹⁾ および彼のエスペラント活動の一次資料を追うことにより、イシガの平和実践活動の内実と彼の葛藤を明らかにしたうえで戦争の抑圧に対するエスペラントの可能性を考察する。まず、次章では、イシガがエスペ란ティストになるまでの軌跡を辿ってみたい。

3. エスペラント活動までの軌跡

イシガの自筆年譜『小・生・書』(NES刊 1985.8.12) によると、彼は1910(明治四三)年、福岡県八幡製鉄所門田官舎にて生を受けた。七歳で父と妹と共にキリスト教の洗礼を受け、九歳から日曜学校へ通い、一二歳でローマ字日記を試み、一三歳でエスペラントを学び、一五歳の時には「軍事教練をきらい西欧の小国にあこがれ」と記載されている。一三歳の彼がエスペラントをどのように学んだのか、詳細は今のところ不明であるが、言語に対する早熟な関心の根底にはキリスト教教育が根を張っていたことは明らかである。少年期より涵養されたキリスト教的平和思想と西洋の言

語への関心を通じて「西欧」への憧れを醸成させてきたイシガは、「祖母から母へと伝えられたキリスト教と、第一次世界大戦後の平和的風潮との中」で育ち、「平和主義—国際主義—人道主義」を自然に受容したと自身を振り返っている⁽¹⁰⁾。

さらに彼は、一六歳にして日本メソジスト福岡教会の日曜学校教師を務めた。前章で触れた久山康編『近代日本とキリスト教（大正・昭和篇）』によると、日本の日曜学校協会は1907（明治四〇）年に創設され、日曜学校教育は大正中期から末期にかけて大きな飛躍的發展を遂げ、その後の教会員増加の有力な基盤となったということである。しかし、教会の人手が足りないことから、受洗したばかりの若い信徒たちが日曜学校の教師にさせられていたのが実際のところであり、教師に抜擢された若い信徒たちは、教える準備に時間を取られ、自分自身の問題を掘り下げる余裕を失い、安易な問題意識のない平凡な人間に形成され易かったということが日曜学校教育の反省すべき点であったと述べられている。

イシガの自筆年譜にも、「日曜学校教師にされた」という表現があることから、自発的に日曜学校の教師を務めたわけではなかったのだろう。しかし彼の場合は、「このころ武者小路実篤・賀川豊彦・トルストイを尊敬し、民族愛よりも人類愛を好ん」（前掲・自筆年譜）だということであるから、キリスト教との関係が深い当時の大正教養主義の風潮の恩恵を十二分に浴びながら、信仰を軸にした文化的体験を積極的に積んでいたことが想像できる。そして、イシガが「尊敬」する武者小路実篤とトルストイがエスペラントを学んでいたことも考え合わせると、彼が後にエスペランティストとなる素地は、少年期の宗教文化的な環境から自然な形で形作られてきたといえるだろう。

後にイシガは、自身の日記のなかで「西洋的なものへ愛好をよせるのは、いわゆる西洋カブレの点もあるかも知れぬが」「自分にはないもの、欠けたものを求めるところに進歩があるのではないか」（1934. 5. 8）と記している。彼の西洋への憧れは、日本が世界的同時性を持ち始めた大正期に教養としての西洋文化を貪欲に享受した知識人に共通するものであろうが、それ以前に、家庭と教会の両方から注入されたキリスト教思想が彼のなかに血肉化していることが深く影響しているといえる。なお、後に太平洋戦争の幕開けとなった真珠湾攻撃のニュースを聞いた際のイシガは、アメリカやイギリスと戦争するということがどうしても実感できないと日記にしたためている（1941. 12. 9）。イシガが兵役拒否に踏み込めたのも、欧米を相手にしての戦争への実感のなさが原因の一つであるようにも考えられよう。

また、イシガは、1920年代後半から30年代にかけて青年期を迎えた知識人の例に洩れず、左翼思想の洗礼を受けた。彼が東京大学文学部西洋史学科への進学のために上京した1929（昭和四）年は、奇しくもプロレタリア文学の金字塔となる小林多喜二の『蟹工船』や徳永直『太陽のない街』が発表され、プロレタリア文化運動が最も

華やかなりし年であり、彼が東京大学に在籍していた三年間（1929-1931）は、運動が隆盛を極め、多くの学生や若い労働者が左傾化していた時期と完全に重なっていた。後にイシガは、「入学の月におこった四・一六の検挙は視野に入らなかったが、プロレタリア芸術運動のもりあがりや地下運動のはげしさはわたしの目にもとまった。」「わたしは唯物論史観にはなじめなかったので、運動には加わらなかったが、弾圧に対する反撥や右翼・軍部に対する反感は人なみにわけ持っていた」と当時を回想している⁽¹¹⁾。

ところで、イシガが戦後公表した日記は、満州事変が勃発した1931（昭和六）年から始まるが、最初の日記（1931.4.29）のテーマは《ほくの理想について》というものである。イシガは、「ほくはただ帝国主義的戦争のみでなくあらゆる戦争をいとう。革命をも。人と人が殺しあうごときあらゆる事を憎む。」と記し、自分の理想は「おたがすすべての幸福のために、よりよい社会建設のために精進し努力する」という世界であり、その理想の世界を目指して進むにあたり、いかなる手段が最も有効であり可能であるかが問題だと述べている。「 Kommunismusをとるか、キリスト教ソシアリズムへゆくか、ファシズムに逃げこむか、あるいは他の何かに行くか。」と選択肢を並べたイシガであるが、次の8月10日の日記には《左へ傾く心》と記されることとなる。

日記によると、イシガは友人の「神吉」らから Kommunismus 運動に参加するよう「せき立て」られ、プロレタリア文化運動の一環に属していた新興教育研究所が刊行していた『新興教育』からも影響を受けるようになり、共産主義の暴力革命に対しても否定的な感情を抱かなくなっていた。

ちなみに、日記に登場する「神吉」という人物は、手塚英孝の回想「神吉洋士のこと」（『文化評論』1968.5）における「神吉洋士」と同一人物なのではないかと推測できる。手塚によると、神吉洋士は、イシガと同じく1929年に福岡高等学校を卒業後、イシガと専攻は異なるが同じく東京大学文学部（神吉は独文科）へ進学している。彼は「俊敏で明徹、はげしい気質の人であったが、人間的な魅力のある人柄」で、1930年夏から翌年31年に逮捕されるまで、全精力を組織の再建に打ち込み、32年に亡くなったという。「彫のふかい、ひきしまったどことなく精悍な感じをうける風貌だったが、生命を賭して仕事にうちこんでいるものにおのずからそなわる気宇に、わたしはふかい印象をうけた。」という手塚の回想から、四〇年近く経った後でも、神吉は手塚をして「ふかい印象」を回顧させようような活動家であったことがわかる。神吉洋士と、イシガの日記に登場する「神吉」が同一人物であるとすれば、イシガは、有能な左翼闘士となった同郷の友人からオルグされていたということとなり、 Kommunismus への傾倒が強まるのも避けられないことであったようにも感じられる。元々は貧者救済活動をしていたキリスト教徒・賀川豊彦を尊敬し、将来は小学校教師になるこ

とを使命としてきたイシガの人道主義的・ナロード主義は「マルキシズムの中に形をとろうとし始め」、「ほくはやがてマルキシズムの中に生きて行くようになるのではないだろうか。」「しばらく外部からの督促がなく、ほくひとりでゆくとすれば、結局彼らのあとを追うのではないかと思う。」と予期するまでになるのである。

そして、翌年1932（昭和七）年に大学院に進学したイシガは、研究テーマとして唯物史観研究を希望するまでになるが、「研究題目として不相当とされ」、結局は「原始キリスト教の研究」をテーマに大学院に籍をおくことになった⁽¹²⁾。しかし同年六月、肺浸潤および慢性腎炎を発病し、この年から1942（昭和一七）年まで、およそ一〇年間にわたり、療養生活を余儀なくされる。だが、この療養生活こそ、イシガにマルキシズムとの距離をもたらし、発病して五か月後の1932年11月、エスペラント活動を始めさせる契機となるのである。

この時期の日記（1932.11.4）には、「唯物史観（よく知らないけれど）が誤りのないことでないにしろ、二千年前の社会との関係を見捨ててキリスト教を考えることができない。」「ほくにとってキリスト教は「三つ子の魂」であるのかもしれない。幾度否定されても、今度はなお強い力で生きかえってくる」と記されている。また、「マルキシズムに攻められて」幼少の頃からの信仰が薄らいできてしまったイシガにとって、この頃刊行された内村鑑三全集が「病床の大きな力」になり、「内村先生の無教会主義とその妥協のない社会批判は、苦くもまたすてがたい滋味となったし、砲声の中できく先生の非戦論は、わたしの血を燃やした」ということも回想されている⁽¹³⁾。

内村鑑三（1861-1930）の「無教会主義」とは、教会に所属し洗礼や聖餐などの儀式を受けられなくとも、キリストを信仰し聖書を学べばキリスト信徒になりうるというものである。また、帝国主義を批判的に捉えていた内村は、日露戦争を帝国主義同士の衝突と見なし、最も多くの迷惑を被るのは平和を追求する両国の国民であるとして絶対的非戦主義の立場をとったことでも知られる⁽¹⁴⁾。内村は1930（昭和五）年3月23日に逝去するが、イシガは自身が発病する直前の同年5月28日に、内村の弟子たちによる「内村鑑三先生記念キリスト教講演会」に参加している。この講演会では、矢内原忠雄「内村先生対社会主義」、塚本虎二「独立人内村先生」、畔上賢三「内村先生と聖書研究」などの講演が行われているが、後にイシガは、この講演会に登壇した矢内原忠雄に私淑する。そして、日中戦争開始後に矢内原が刊行していた『嘉信』の読者となり、自身も無教会主義に近づき、福音への信仰に目覚めてゆくことになる。

イシガのエスペランティストとしての出発は、突然の病によりマルキシズム一色の環境から切り離され、孤独の中で自らのキリスト教信仰と改めて向き合う機会を得られたことを始点としていたのである。

4. エスペラント通信の開始とW. R. I. への参加

満州事変が勃発した1931（昭和六）年、二一歳の大学三年生であったイシガの日記には「「なんじの隣人を愛せよ」／大砲の音にふっとんだ聖句よ／教会よ／そしてクリスチャンよ／いつのまにか戦争は始まっていた／こうなると手も足も出ぬわれわれの無力さ／中国の兄弟よ許してくれ／いつのまにか戦争を始めさせてしまったわれわれの無力を」という慚愧のエクリチュールが記されている。「ニッポンの発狂時代はじまる」というイシガの注記の言葉どおり、日本はこの後、常軌を逸した泥沼の世界戦争へと突き進み、満州事変から約一年半後の1933（昭和八）年2月、国際連盟を脱退し、侵略戦争とファシズムへ大きくシフトする転回点を迎えるとともに、国民への思想・言論統制をますます強めた。

1933年1月から2月にかけてのイシガの日記にも、「大アジア聯盟」の結成や国際連盟脱退へと動いた日本の姿を伝えるメディアの「醜体」についての叙述がみられる。国際連盟脱退と大アジア聯盟の結成は日本国家社会党が掲げていた外交政策であることから⁽¹⁵⁾、右派の政治力が非常に大きくなっている当時の状況がイシガの日記にも生々しく刻まれていることが伺える。総力戦体制構築とともに、日本のメディアが国民への現実的な影響力を持ち始めた1930年代、軍需景気の味を知り、なおかつ未だ敗戦を知らない国民たちの多くは、メディアの影響下で戦意昂揚に浮かれ、戦争協力へと駆り立てられていったということであるが⁽¹⁶⁾、イシガの日記には、国内メディアに躍らされるどころか、メディアへの嫌悪感がたびたび吐露されている。

先に見たように、イシガは、善と美と人間の理性を重んじたキリスト教的ヒューマニズムの空気の中で成長し、「弾圧に対する反撥や右翼・軍部に対する反感は人なみにわけ持っていた」ため、戦争賛美一色の祖国メディアのプロパガンダに生理的な嫌悪感を抱かざるをえなかったことは容易に想像できる。さらに病床にあって社会から切り離されていたことから、世の中を冷静に捉え得た可能性もあろう。そして、次のイシガの証言は、エスペラント通信を始めた理由が、国境を越えて「平和」を語りあえる場を手に入れるためであったことを示唆している。

わたしは手が動かせるようになると、病床の余暇を利用してエスペラント通信を積極的に始めた。エスペラントと平和主義・国際主義は切りはなせない関係にあったから、エスペラントの文通では「平和」のことばがはばかりなく使えた。多い日には六通もまいこんだ。ウクライナの婦人労働者も、シャンハイのアナーキストも、チロルの鉄道員も心やすく話しかけてくれた。パプアのF・J・ウイリアムズからは、クエーカー主義と平和主義の文献がどっさり届いた。⁽¹⁷⁾

上記で触れられている「パプアのF・J・ウイリアムズ」こそ、イシガの兵役拒否

への道を開いた大きな要素の一つである W. R. I. (War Resisters' International [戦争抗止者インターナショナル]) を紹介した人物である。

MEMORANDO pri Militrezistado kaj Esperanto (戦争抗止とエスペラントに関する覚書 発行年月日不明) という資料によると、W. R. I. とは、第一次大戦中に反戦を貫いた四カ国の小さなグループが1921年にオランダのビルトホーフエンに集まり創設した組織であり、「戦争は人道に対する犯罪である。したがって、われわれはいかなる戦争も支持せず、戦争の原因をすべて排除するよう努める決意を固めている。」⁽¹⁸⁾ という「宣言」(DEKLACIO)のもと、世界中の戦争反対者を見つけ出し、互いに連帯させることを主な目的としていた。

イシガは、W. R. I. 本部と連絡を取り、入手した機関誌 *La Militrezistanto* で賀川豊彦と高良富子の名前を目にし、「各国になかなか *militrezistanto* [兵役拒否者] がいるらしい。」([] 内筆者) と刺激を受ける。機関誌には毎号、各国の兵役拒否者の入獄と救援活動に関する記事が記載されていた。

先にも触れたように、賀川豊彦 (1888-1960) は、一六歳頃のイシガに大きな影響を与えた人物の一人である。貧者救済のための社会活動に身を挺したキリスト教徒であり、ベストセラー小説『死線を越えて』(1920) の著者としても知られる賀川は、ハンセン病隔離療養事業を推進し、患者にキリストの福音を伝え希望を与えることを目的とした「日本MTL」⁽¹⁹⁾ の理事をも務めていたが、イシガもまた、W. R. I. に接触する一月前にこの団体に加入していた。賀川がW. R. I. の会員であったことが、後のイシガのW. R. I. への加入を促したことは想像に難くない。

手記⁽²⁰⁾によると、当初イシガは、W. R. I. への参加者の政治的立場や宗教が多種多様であること⁽²¹⁾ や、自分が病身で当時は兵役とかかわりのない「丙種」というカテゴリーに入れられていたことから、一年ほど加入を躊躇していた。しかし、「日本支部の名はあっても今はほとんど顧みる者もないらしい運動に名をつらねることを、平和を求める日本人としての義務のようにも思うようになり」、翌年1934年にW. R. I. へ参加する。イシガは、機関誌を購読するだけでなく、周囲の友人や、母校のYMCAや雑誌社にW. R. I. 関係の印刷物を配布するが、弾圧下の時代に「何らの反響も期待」できず、「病床の気休めくらいの意味しかなかった」ということであった。

だが、彼の草の根活動の痕跡はW. R. I. の機関誌 *La Militrezistanto* にはっきりと記録されている。イシガは日本での平和活動宣伝の困難さをW. R. I. に書き送っており、1937年8月号の *La Militrezistanto* には「MALFACILA LABORO EN JAPANUJO」(日本における困難な仕事) として彼の手紙の抜粋が紹介されているのである。

その内容は、イシガが、妹を通じて東京のクリスチャンの女子学生たちにW. R. I. 関連の資料を配付し、彼女らは興味を持ってそれらを読んだということ、しかし異常なほど執拗な警察の監視の下ではW. R. I. のメンバーを構成することは不可能である

こと、現実的に可能なのは、合法の強固な平和団体を作り将来的に W. R. I. に参加するメンバーをそこから獲得するというものである。さらに、日本の平和運動は未熟ゆえ W. R. I. のイデオロギーを消化できないため、今はもっと柔らかく、消化しやすい食事を必要としている、と独特のユーモアのある表現も見られる。

イシガにとって、祖国である日本は背を向けるべき不自由な国となり下がってしまっていたが、そのような国の国民として、たった一人でも、「他にやる人がなければやっておきたかった」という義務感から、イシガはその後 W. R. I. に協力をし続け、後に参加する「日本基督教エスペランティスト聯盟」(La Japana Esperantistaro Kristana : JEK) でも、W. R. I. の情報を提供することを申し出ている⁽²²⁾。

情報が規制される戦時下において、あからさまな反戦運動を施行することはできないが、エスペラントを通して海外からの生きた情報を入手し、それを同じ世界観のキリスト教徒たちに拡散し連帯を強めるという形での言論活動に、イシガは自身の使命を見出してゆくこととなるのである。

5. JEK (日本基督教エスペランティスト聯盟) での活動

W. R. I. への投稿において、特高警察が暗躍し、思想的に未熟な日本では合法的な平和運動が難しいことを訴えていたイシガであるが、エスペラントでの国際通信に対しては、平和実践に繋がりうるものとしてそれなりの意義を見出していた。

1935 (昭和一〇) 年、福岡から東京へ戻ったイシガは、日本基督教エスペランティスト聯盟 (La Japana Esperantistaro Kristana 以下、JEK) に参加し、国際通信の窓口を担当する。1937 (昭和一二) 年『基督教年鑑』(日本基督教聯盟年鑑部) によると、JEK とは、1935 年 9 月 23 日に「第 23 回日本エスペラント大会のキリスト者分科会出席者並に賛同者により」成立した組織で、発起人は野原休一、渡邊隆志、川村清治郎、松原雪江、尾崎元親らであった。その「目的及事業」は「イ、基督者間にエス語の普及。ロ、エスペランティスト間に基督教の普及。ハ、一般的伝道及宣伝。ニ、会員相互の親睦及協力」と記されている。

イシガは当初より「国際基督教エスペランティスト同盟」(KELI) への窓口を担当し、1939 (昭和一四) 年には代表通信者を務めた。なお、会の発足に先立ち、機関誌 *LA VINBERUJA BRANĈO* (葡萄の枝) が 1935 年 4 月、7 月、9 月、11 月と第 4 号まで刊行されるが、その後、内務省納本の雑誌として届出をおこない、1936 年 1 月には *LA VINBERUBRANĈO* として第一巻第一号が刊行されている。

イシガは機関誌の誌面作りにも積極的に関わり、多数の原稿を寄せた。内務省届出前の、1935 (昭和一〇) 年 4 月に刊行された最初の号にイシガが寄稿したのは「基督教の言語—アングス「原始基督教の環境」より」であるが、これは、サミュエル・アングス (Samuel Angus 1881-1943) の *THE ENVIRONMENT OF EARLY CHRISTIANITY*

の第8章「キリスト教の最初の国際語—Koiné—キリスト教におけるギリシア語の重要性—ギリシア語の伝播—ディアスポラ、パレスチナにおけるギリシア語—イエスの言語—西洋のラテン語」⁽²³⁾の抄訳である。

この抄訳では、「普遍語」としての役割を持つ「希臘語」(Koiné)の出現は「万人が容易く思想を交換し得た所の史上最初の時機」を意味し、その時期にキリスト教が生まれたことは必然であること、原始キリスト教の伝道活動と普遍語の普及は強く結びついていたこと、そして、普遍語で福音を宣べ伝えたイエスは、言語の問題に当然関心を寄せていたと述べられている。イシガの大学院での研究成果の一つであることは想像できるが、ほかでもないこの箇所をイシガが取り上げ寄稿したことから、国際語であるエスペラントの普及こそが、世界に平和と神の福音の伝播をもたらし得るのだというメッセージを、エスペ란ティストとキリスト教徒の双方に届けたいという彼の思いを感得することができよう。

そして、同年9月号には、彼は「基督者エスペランチストの仕事について」という文章を寄稿している。ここではイシガは、自分たち“Kristanaj Esp-isutoj”(キリスト教エスペランティスト)の立場は「二重国籍者」であり各々の利害を代表するが、エスペランティストとキリスト教徒の二者の間で「平和ならしむるもの」として働くことが任務であると主張する。そして、エスペランティストよりも人口の多いキリスト教徒の間にエスペラントを普及させ、キリスト教関連文献を英語ではなくエスペラントで出版することが運動を前進させるのに効果的であると提案し、最後には、下記のように、日本が侵略戦争を仕掛けてしまった相手である中国のキリスト教徒たちとの連帯を呼び掛けている。

最後に英米以外の基督教世界、就中支那の基督者達とEsp.を通じて連絡し握手することの必要を強く主張したい。平和の君キリストに従ひ、平和の言葉Esp.によってつながれる我々こそ、最も勇敢な平和の為の戦士でなければならない。此の極りなく困難な戦を戦ふ為に、其前提とし準備として、中国の同志と手を握ることは何よりも重要である。

「平和の為の戦士」としての「基督者エスペランチスト」の立場を力強く訴えたこの文章には、言葉での連帯を通して侵略戦争と戦うべきだというイシガの決意が顕れている。

そして、翌年1936年1月号の「HEJMA PAĜO」(ホームページ)では、JEKの「先駆者」であった“Japana Kriatana Esp-ista Asocio”(日本キリスト教エスペランティスト連盟)についての情報提供および、海外メディアにおけるキリスト教関係のニュースの情報提供を呼び掛けるほか、イシガ自身はW. R. I. と *Dia Regno* (KELI)の機

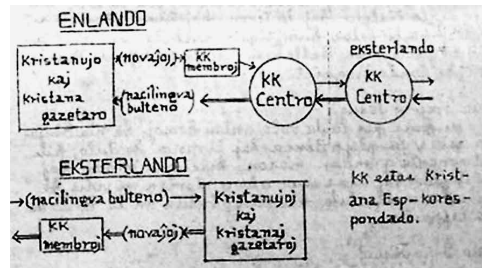
関誌。「神の国」の意)からの情報提供を引き受けるとしている。

また、イギリスでは、エスペラント国際通信で集めた各国のプロレタリア運動のニュースをまとめた *Contact* という雑誌が毎月 2200 部も出ること、JEK もその一部の事業として、エスペラント国際通信で各国のキリスト教界のニュースを集め、日本の“*Kristana gazetaro*” (キリスト教系メディア) へ供給したら随分有効な *propagando* (プロパガンダ) になるのではないかと提言している。この文章からは、イシガが国際的なプロレタリア運動と連携したキリスト教エスペラント活動にも考えを及ぼしていたことがうかがえるが、国内では、*MARSU*、*Majo* などのメディアを刊行し、統一戦線を目指した元プロレタリア・エスペラント運動団体が弾圧を受ける以前の時期であったことから、イシガは彼らとの共闘も視野に入れていた可能性もあるだろう。

このように、国際通信やエスペラントを用いた出版物の重要性を強調し、統一戦線の可能性を示唆してきたイシガであるが、皮肉なことに読者からの反響は全くなかったようである。

イシガは1936年4月号において「*Kristana Esperanto-Korespondado—JEK* ノ一事業トシテー」を寄稿し、前回の呼びかけに対し反響がなかったことを伝えるとともに、さらに読者に意見を乞うている。

この文章では、「神の国建設のための一兵卒」として、*Kristana Esp-korespondado* : *KK* (キリスト教エスペラント通信) を通じてニュースを共有しあうことの必要性が述べられ、イシガが提案するニュース共有システムについて、図を用いた説明がなされている (画像1, 日本エスペラント協会所蔵)。



画像1 日本エスペラント協会所蔵

イシガの説明によると、まず、各国のキリスト教エスペ란ティスト団体がキリスト教エスペラント通信センター (*Kristana Esp-korespondado Centro*) を作り、国内外からニュースを集める。国内のニュースは会報に編集し各国のセンターに送る。国外からのニュースは自国語に翻訳して会報を作り、国内のメディアや希望者に配布する、というシステムである (「即ち *Centro* [センター] は二種の *bultenoj* [会報] を夫々国外と国内に送り、之が *KK-laboro* [KKの職務] の枢軸となるわけでありませう。」〔内筆者〕)。またイシガは、今日のニュース網ではキリスト教徒の平和のための活動を知らせるニュースなどは一顧だにされない点に触れ、「適当な通信網を持たない」キリスト教メディアの貧弱さを批判している。

「外国の事は日刊紙のまる写しか、せいぜい英米又は良くつて独の同種の *gazetaro* [新聞] からの貧しい抜き書き」〔内筆者〕であり、北欧や中国や諸小国などのキ

リスト教界のニュースは殆ど手に入らず、日本のニュースも知られていない、だからこそKKの事業は必然的に要求される仕事だとイシガは強調している。

繰り返される主張から、この時期におけるイシガのエスペラント国際通信と平和実践活動に対する情熱が感じられるが、興味深いことに、このような呼びかけはこの後一切見られなくなる。さらに、1936年7月9日の日記には「家庭を持たず、また地位をも持たぬ人間を社会がうとむことは、社会の自衛上、ある程度までもっともなことだ」「社会は考える頭がますことを喜んでいないらしい。考える頭は少なく、働く手が多くなることを望んでいる。」と記されている。

病床にあってエスペラント活動を行うイシガにとって「社会」の壁を感じさせる出来事とは、エスペラント活動のなかで生じたものである可能性は否めない。イシガが「考え」た新たな試みは、またもや会員の間でも何の反響も得られなかったのではないだろうか。

その後のイシガのJEK機関誌への寄稿をみると、日本MTLの機関誌に掲載された、宮古のハンセン病療養所の看護師の手記「北より南へ—ある看護婦N子さんの手紙—」(『日本MTL』第57号1930.11)のエスペラント訳や、内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』(原題 *How I became a christian*)のエスペラント訳、そして1940年に斎藤秀一が死亡した後は、彼への追悼の意味合いもあってか、ローマ字についての論考を二本掲載しているが(「エスペランチストとローマ字」1940.12、「国定ローマ字」1941.6)、いずれも国際平和や国際通信を訴えるようなラディカルなものではない。

また、1939年7月号には、1939年3月6日に東京で会員との会合があり、その議決としてイシガが代表通信者として選定され、「当会prezidanto」には野原休一が就任したことが記されている。野原はJEKの発起人の一人であるが、同時に、日本の中国侵略を正当化する活動をしていたエスペラント報国同盟の発起人の中心人物で、国粹主義者であった。

野原が代表理事となったためか、1939年7月以降の機関誌LA VINBERUBRANĈOには、中国戦線に徴兵された真壁良治という名のエスペランティスト(キリスト教徒ではなくイスラム教徒とされている)が嬉々として戦いに臨む様子を伝えた報告⁽²⁴⁾が掲載され、「時々慰問文を出してあげてください。」という編集部から読者への呼びかけも記されている。

また、1940年1月号の表紙には「皇紀二千六百年記念・JEK第五周年」とあり、1941年6月号掲載の川村清治郎の「羊頭に際して」では、「我々エスペランチストハ先ヅ日満支並ニ世界ノエスペランチストヲ結合シ「大東亜共栄圏確立及世界新秩序確立ノタメニハエスペラントノ必要ナ事」ヲ一般ニ知ラシムル事ガ急務デアル」という声高な主張が叫ばれていることから、LA VINBERUBRANĈOも、JEIと同じく戦争

協力体制へと移行したことが窺える。イシガはJEKの要職についているだけに、平和への想いは内に秘めるしかなかったことが想像される。

6. エスペラント活動の拡がりとは兵役拒否への軌跡

ところで、イシガは活動の場をJEK以外にも広げていた。JEIの主事・三宅史平から依頼され、1937年1月から*ESPERANTO - LERNANTO*に「若きザメンホフ」を6回にわたり連載し、これ以降、JEIの機関誌であるエスペラント*La Revuo Orienta*への投稿が増えてゆく。

一方で、療養中ながら斎藤秀一の言語運動に協力し、斎藤が1937年に創刊した*Latinigo*創刊号巻頭の田中館愛橘論文のエスペラント訳を担当した。そして、1938年5月には、斎藤主宰の雑誌『文字と言語』(1938.5)に、「エスペラント運動におけるザメンホフ主義」を寄稿している。

戦局の悪化から、キリスト教徒として、そしてエスペ란ティストとしての平和実践活動は実際的には困難であり、新たな試みを提案しても何の反応も得られないという現実におつかつたイシガは、平和のための国際通信を呼びかける運動に一旦終止符を打ち、ザメンホフの思想に改めて触れ、エスペランティストとして初心に戻ることに必要性を感じたのではないだろうか。1938年9月20日の日記には、「平和を愛するということがチョコレートをなめるようなあまいものでなく、正義人道のために殉ずるといような勇ましいものでもないことを、今度はいっそう感じる。」と記されている。

なお、『文字と言語』に寄稿した「エスペラント運動におけるザメンホフ主義」において、イシガは、ザメンホフが1906年に行ったジュネーブ大会での演説に触れ、ホモラニスモ思想（「人類が一つになろうとする四海同胞の思想」）なしのエスペラント運動はザメンホフにとって意味をなさないものであったとし、ザメンホフの思想を鮮やかに受け継いでいるのは労働者エスペラント運動であり、「合理的なものを守り道理をおした、ててゆかうといふ同一目的の為に団結せんとする」近頃の言語運動の共同戦線の根本的態度はザメンホフの精神と通ずるものがあると述べている。つまり、イシガは、転向の時代に共同戦線を張り運動を持続させようとしていたプロレタリア・エスペラント運動を高く評価しているのである。戦争協力体制へとシフトしつつあるJEIやJEKでの活動の場を確保していたイシガは、一方でプロレタリア・エスペラント運動との共同戦線を展開する斎藤秀一のアカデミックな言語運動にも協力し、共鳴する姿勢を隠さないことで、良心のバランスを取っていたといえるであろう。

なお、斎藤秀一とは、山形県で小学校教員として生計を立てながら、学校の児童や村の青年たちへのローマ字教育にも携わっていた進歩的なエスペランティストであ

る。言語運動の現実にぶつかりながら国語改革運動に従事し、〈言語帝国主義〉という術語を生み出した斎藤は、特高警察の監視や周囲の無理解に苦しみながら、言語運動の理論と実践を体現し、言語運動史に大きな功績を残した。前掲の後藤齊の著書によると、「エスペラントとローマ字運動を社会問題として扱う共通の関心」が、斎藤とイシガを結びつけたということである⁽²⁵⁾。

しかし1938年、斎藤は検挙され、彼に繋がるエスペランティストたちが芋づる式に検挙される「左翼言語運動事件」が引き起こされ、日本のプロレタリア・エスペラント運動は完全に潰え、斎藤も若くして命を奪われることとなった。イシガも斎藤との関係から1939年4月に取り調べを受け、以降は特高の監視下に置かれるが、彼の場合は激しい迫害を受けることはなかった。なお、後藤は、イシガの受けた取り調べについて「イシガがマルクシズムとの知的格闘を経たことは確かだが、「相当熾烈なる共産主義思想を抱持」(『特高月報』1939.9)とは特高の見立て違いと言うべきだろう。」と述べている⁽²⁶⁾。だが、1940年の日記には、「共産主義運動を思うとき、かつて心を寄せたどの女に対してよりも心が乱れるようなのはなぜか？」(1940.6.17)という文言もみられ、一時期心を傾けた共産主義への情念には複雑なものがあったことは確かなようである。また一方で、イシガと共に斎藤の言語運動に携わった小久保覚三は厳しい取り調べを受けることとなった。イシガは後に、自身の兵役拒否を後押ししたものは、小久保への後ろめたさであったことを告白している⁽²⁷⁾。

特高の監視下に置かれたイシガは、体制に与していったJEIやJEKで当たり障りのない活動をする一方、「侵略戦争のための国防献金をせず、愛国行進曲も歌わず、わずかな小づかいをさいてスペイン内乱の避難児童のためにW. R. I. が開いたキャンプのために送金し、またW. R. I. がコロンビアに開いた拒否者のコロニイのために協力」⁽²⁸⁾するという形で組織を離れた抵抗を続けるが、1940(昭和一五)年より徴兵制度に「第三乙種」が新設され、イシガが振り分けられていた「丙種」も召集の対象とされることとなった。その後—1940年5月26日以降、イシガは日記をローマ字で書き、当局に問題視されそうな箇所は我流の速記記号で記し、1941年秋には、エスペラントの手紙、W. R. I. 関係資料、共産主義系の資料、プロレタリア文化運動関係の書籍を隠している(1941.10.30の日記)。

だが、この時期のイシガは、もう一つの自分のゆくべき道を見つけていた。それは、翻訳活動である。1938年、エスペラント国際通信の経験を活かし、ストックホルムのエスペランティストと連絡を取ったイシガは、ラーゲルレーヴの作品『ベツレヘムの幼子』のエスペラント訳 *Infanoj de Betlehem* をローマ字日本語に翻訳したものをラーゲルレーヴ本人に送っている。そして、これを契機にラーゲルレーヴの長編小説『エルサレム』を翻訳すべくスウェーデン語を学ぶことを決意し、『ベツレヘムの幼子』をエスペラント翻訳した“S-ro. Frode”という人物に語学学習の援助を乞うと

共に、ラーゲルレーヴに『エルサレム』翻訳の許可を願い出、二年間のスウェーデン語学習を経て、1940年10月、『エルサレム』第一部の翻訳を始めた。翻訳だけは成し遂げたいという思いから、後一年は点呼に応じなくともよいように医者に診断書を書かせての集中的な活動であった。

エスペラントを通じてのスウェーデン語の学習および翻訳作業は、イシガにとって一つのアジールとなったと思われる。1940年5月2日の日記には「ニッポンをわが国としてでなく、ニッポンとしてながめられる折がときどきある。たとえばスウェーデン人あたりの目で。」と書かれてあり、『エルサレム』の翻訳は、イシガに祖国日本を客観的に捉えさせる役割を果たしたことがわかる。そして、「わたしとしては、ニッポン人であることは小さなことだ。大切なのはイシガ・オサムであることだ。」(1942. 2. 7)「エスペラントによってわれわれはニッポン人以上になることができる、すなわち人類人（人類の一員としての人間）に！」(1942. 4. 28)といった情熱的な言葉からは、祖国の社会からの疎外に遭いながらも、エスペラントを通じて国境を越え、尊敬すべき作家と繋がり、彼女のキリスト教文学を翻訳するという「人類」として誇りを持てる仕事を自力で手に入れたイシガのよろこびを感じ取ることができる。

1942年末、ついにイシガは『エルサレム』第一部出版に漕ぎつけた。そして、この時局に自分の翻訳が出版できたことに「神の恵み」を感じ、「神の前に正しい歩みを取らなくてはならない」という意味で兵役拒否を決意することになるのである。ただし、その後の戦況の泥沼化や身近な人間の満州移転の情報を受けたイシガは、自分が成し遂げた翻訳の仕事が「いまのニッポンの社会でほとんど問題にもならぬ仕事」であると思われ、「忘れかけていた孤独さをまた感じる」(1943. 1. 28)と記さずにはいられなかったことも押さえねばなるまい。

また、この時期のイシガは、JEIの機関誌エスペラント *La Revuo Orienta*において、日本やアジアの人々にとって習得しやすく改良した「Orienta Esperanto」を提唱、論争を呼び起こし（「Orienta Esperanto」1942. 7）、八紘一字のコンセプトに沿った号である1943年1月号では「建設の課題 日本文化宣揚のために」という文章を載せるなど、国策である大東亜共栄圏構想の延長線上でエスペラントを捉えようとするJEIの方向性との衝突を巧妙に回避したエスペラント活動を前景化させてもいた。だが、私生活では、日本語を排除した日記に、近いうちに実現しなければならない兵役拒否の不安と決意、国家という枠組みを超えたザメンホフのホモラニスモへの思いを綴り、「八紘一字という美しい理想」が死にたくない人間をおおぜい殺すことを必要とするものならば、それを美しいともよいとも思えない。」(1943. 3. 5)と本音を記している。

そして、1943年6月の日記には「スウェーデンのエスペラント雑誌を見て思う。エスペラントの本、スウェーデンの本が自由に買える時代は楽園のようだ。とっくにそれら

のことはあきらめのうちに入れてしまった。」(1943. 6. 18) と書く。『エルサレム』第一部翻訳を終えることはできたにせよ、イシガは、自分が求めたエスペラントの理想、憧れの西洋が遠くなったこと、自身の仕事が現社会にとってアクチュアルなものではないことを意識せざるをえず、無教会主義の思想に支えられながら、誰にも相談することなく兵役拒否の準備を秘密裏に進めてゆくこととなる。

7. 兵役拒否と「翻意」

1943(昭和一八)年8月1日、イシガはついに兵役拒否を実行した。本籍のあった岡山県美作で行われる軍隊からの点呼に応じない旨を点呼地の村役場に電報し、憲兵隊で自首したのである。しかし、イシガの手記によると、彼を待っていたのは、親切的な憲兵から与えられた「平和」な拘留生活であった⁽²⁹⁾。イシガは手荒な真似はされず、憲兵のためにW. R. I.の宣言や綱領を和訳させられることになる。そこでイシガが新たに発見したものは、憲兵も同じ感情を備えた人間であるという実感であり、彼らも戦争を望んでいるわけではないという事実であった。

日記によると、イシガは、刑が軽く済んでしまうことで、また来年点呼を課されたらという推測に苦しみ、「再び拒否をくり返すことはできそうもない、という弱気」と、兵役拒否を行動に移したことで外国の同志たちにも一応の申し開きは果たしたという思いにとらわれ、さらには衛生兵となるために、以前日本MTLの機関誌で触れたことのある沖縄のハンセン病療養所で働くことまで考える。そして、そんなイシガの心に拍車をかけるように、懇意にしていた牧師夫人から「祖国日本の為に死んでください」という手紙が届き、『エルサレム』の出版を引き受けてくれた岩波文庫の編集者からは「戦争がおこるのも兵役につくことも、すべて神の命じ給うところである。」と書き送られ、イシガの「拒否」の心は激しく揺らいでいくこととなった。

また、兵役拒否の実行は、「考えの足りな」かった自身との対峙を突き付けるものであった。イシガは、憲兵に自身の兵役拒否を説明するための議論のなかで、自分の戦争観、平和観を言語化できない自身に気づき、戦争の中にも平和があり、平和すなわち善とも断言しえないこと、戦争の世で生きるには、自殺しない限りどうしても軍事的生産に携わらなくてはいけない以上、真の戦争抗止はできない、という考えに至る。

さらに、W. R. I.の宣言「戦争は人類に対する罪である」(“Milito estas krimo kontraŭ la homaro.”)の“krimo”(罪)を英語の“crime”(法律上の罪)ではなく“sin”(宗教・道徳上の罪)と似た意味に解し、行動してきた自身に気づく。すべての戦争を“krimo”とみなし、戦争抗止者は全力をあげて積極的に運動するべきだというW. R. I.の主張と自身の考えとの齟齬に眼を瞑り、W. R. I.の主張を「無理」だと感じながらも「義理」からW. R. I.に関わって来た自分自身を省みることになったイシガは、戦

争と平和を二項対立で捉えるのではなく、戦争は神の摂理であり、人間の“罪”の結果となって現れたものなのではないかと確信し始めるのである。

W. R. I. に最初に接触した1933（昭和八）年頃のイシガは、「マルキシズムに攻められて」信仰が揺らいでいたにもかかわらず、W. R. I. の宣言の“krimo”をキリスト教における“sin”と似た意味に無意識に解していたという気づきは、彼の信仰が深く根を下ろしたものであったことを改めて彼自身に突きつけるものとなったのではないだろうか。W. R. I. の機関誌がエスペラントで書かれていたことで、イシガは恣意的な翻訳のもとに言葉を受け止め、その過程で生じた齟齬を突き詰めることはないまま、「戦争」に対置するものとしての「平和」という概念を自明のものとして行動していたが、その齟齬を清算し、「罪」「戦争」「平和」という概念に対する彼自身の考えとキリスト教徒としてのアイデンティティの再確認へと促したものが憲兵との対話にほかならなかったことは興味深い。

また、日記によると、イシガが憲兵隊で面会を強要された日本の「代表的平和主義者」であるクリスチャンたちは、イシガと顔見知りであるにもかかわらず見覚えがないと言い張り、日本軍をキリストにたとえ、イシガが聖書をはき違えたとして彼を非難したという。「高名なクリスチャンたちの神よりもオカミを恐れるかのような言動」の浅ましさに幻滅したイシガは、結果的に「平和主義者」としての志を失い「転向」を選ぶこととなる。イシガの「転向」もまた、「平和」という概念への問い直しの延長線上にあったのである。

1943年12月、罰金五〇円で解放されたイシガは、立ち寄ったJEIで、「左翼言語運動事件」に連座させられ激しい迫害を受けた小久保が、イシガの友人であったことから指名手配を受けたこと、しかしその前に彼が腸捻転で亡くなっていたという情報を得、強い衝撃を受ける。そして、自分の兵役拒否を促したものには小久保への後ろめたさもあったことを思い起こし、「生ける屍」となった自分を「敵を殺すためで行って死んでくるために」用いるという考えに至り、すべてを神に委ねることを決意するのである。

以上のイシガの回想から、彼の兵役拒否とその後の応召の背景には、エスペランティストとしてのサバイバーズギルトがあったことが伺える。一方で、彼が現実につかかって得た兵役拒否と挫折体験は、イシガに改めてエスペラントの「よろこび」を感じさせるものとなった。

1944（昭和一九）年2月8日の日記には、「今しかけていること」として、「エスペラント単語の使用度調べ」が挙げられ、同年2月29日の日記には、「ニッポン語はかならずしもひとつのことばではない。わたしのある種の思想はある種のニッポン人にもみ通ずる。エスペラントのよろこびは、これを学ぶと同時にこのことばの通じる相手を見いだし得ることにある。」と記されている。

破滅的な戦争へと突き進む祖国が命ずる兵役とそれへの拒否、様々な立場の人間たちとの議論を通じて、イシガは、国家と自動的に結びつけられてしまう母語にはない、エスペラントだけがもたらす「よろこび」を記さずにはいられなかったのであろう。

その後、イシガはハンセン病療養所での勤務中に応召される。だが、彼のかねてからの希望通り、衛生兵として任務に就くことができ、結果的に人を傷つけることなく敗戦を迎えたことで、彼の信仰心はさらに揺るぎないものとなってゆくのである。

8. 戦後の平和実践活動 — 『イシガ語有理』 —

イシガの兵役拒否は、戦時下にキリスト教エスペランティストとして生きようとしたイシガの思想の結果であるとともに、イシガに改めて神の摂理とエスペラントの「よろこび」を教えることとなった。

戦後も、キリスト教エスペランティストとしてのアイデンティティを強く保持し続けたイシガは、引き続きハンセン病療養所（敬愛園）で働き、患者たちに福音を伝え、エスペラント講習も行っている。また、1950年代から60年にかけては福岡拘置所訪問を始め、死刑囚の遺した文鳥を引き継ぐなど、「罪」を犯してしまった人間に寄り添う活動もみられる。そして、50年代後半からは、福岡の純真女子高等学校、続いて筑陽女子高等学校で教鞭をとった⁽³⁰⁾。戦後のイシガの他者との関わり方の根本には、戦前・戦時下の孤独な闘いを経てたどりついた、神の摂理に対置されるべき人間の営為、という悟りが息づいていたのではないだろうか。

なお、イシガは文筆活動も盛んにおこない、「海外の無教会精神」（『生命の光』1949.4）では、1948年のスウェーデンでの万国エスペラント大会で発表された、KELI（国際キリスト教エスペランティスト連盟）を紹介するためのErik Carlénの論説に触れ、キリスト教エスペランティストの共通観念として自然発生的な無教会精神があると述べ、「エスペラントという国際語を媒介」することで、伝統的な生活環境を脱出してみたときに、人は新しい眼で自分の立場をかえりみ、信仰の本質的なものとその一時的な形式とをよりたやすく区別しようとし、エスペラントを通じて、「キリスト教の大通りからはなれた片隅」にある「自由な無教会的な魂」と交わりを深められる日を願ってやまない、と締めくくっている。無教会主義とエスペラント活動で、病身で孤独な自身を支えつつ戦時下を生き抜いたイシガにとって、エスペラントとは、伝統的なものや自明とされてきたものを異化する言葉であるとともに、組織や団結に頼らず独立する人々や、傍流にあり片隅に追いやられた人々を個人として結び付ける言語であったと思われる。

日本の近代的知識人の多くが、「西洋」への傾倒から個を確立しようと自意識の病に苛まれるも、戦争という制御不可能な状態に置かれたとき、表面的な欧化主義の反動で雪崩を打つように民族主義へ移行、共同体へと回帰していった傾向を見せたのに

対し、イシガは、キリスト教、エスペラント、 komunism という「西洋」からの洗礼を受けながらも、それを自らの主体性として血肉化し、民族、国家、国語、といった共同体論理を常に相対化し得た。その背景には、複数の段階を踏んだイシガのキリスト教受容が、内村鑑三の日本的キリスト教である無教会主義への共鳴で完成したこと、救いを求める拠り所としてのキリスト教信仰ではなく、「イエス」という人格を、「人」、「師」、「主」として敬うという形の信仰のあり方であったこと、そして、人間の創り出す歴史を神の摂理に委ねることによる自意識からの解放といったものもあったであろう⁽³¹⁾。また、信仰と強固にリンクしていた彼のエスペラントへの意識と、エスペラントを通して得た、民族や国籍を超えた概念—「もっともよいものには国境がない」「最高度にわたしであること。」(1940. 11. 9, 1941. 11. 17の日記)—との巧妙なバランスが、イシガ・オサムという人間の個を確立しえたということも考えられる。

1978(昭和五三)年、六八歳のイシガは、ザメンホフの精神を引き継いだ「イシガ語」の理念を語った『イシガ語有理』を自費出版した(画像2, エスペラント博物館よこはま所蔵)。「イシガ語」のコンセプトは「国語という観念のほかに国語にしばられない個人語という観念を確立させることは表現の自由にもかかわることで、これからますます主張されてゆかなくてはならない」というものである。ここでは、「いずれはニッポン語の Rômazi 化をめざすという立場」から、日本語を表音化した「よこがき」、「おくりがな廃止」、固有名詞の「カタカナがき」という表記法、身分や性差別を表す代名詞などの排除が提案され、漢字については、「教養の文字としてながくのこるのはかまわない」が「漢字が支配者の文字、権力者の文字として国民におしつけられることがなくなればいい」と述べられている。

なお、あとがきは次のようなものである。

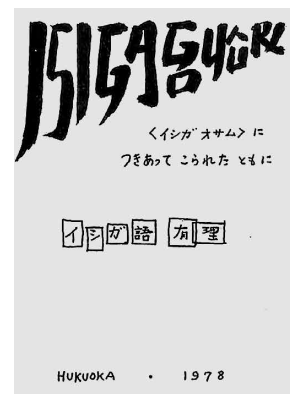
コトバはいきてうごいています。そのうごきを人類の平和な協同生活のために役だてるか、それとも人類の分裂と対立のために利用させるかはわたしたちの選択にまかされています。

わたしはナチスのために一家みなごろしにあったザメンホフの志をうけつぎながら、人間語=人類語の成立の日に向かってイシガ語のあゆみをすすめたいとおもいます—

それは“みんなでいきるために”

個人語から人類語へ！

コトバをとおして平和を！



画像2 エスペラント博物館よこはま所蔵

『イシガ語有理』冒頭には、戦時下のイシガの日記（1940年8月日付なし）「ぼくは別にニッポン語を話すつもりはない。ぼくのコトバはイシガ語であればそれで結構。」が引用されていることから、「イシガ語」の発想は、国威発揚がうたわれ、西暦使用が排除され皇紀使用に移行した時代の日本語へのアンチテーゼとして生まれたのであろう。そして、ザメンホフの精神を引き継ぐということは、エスペラントという産物を引き継ぐということだけを意味するのではなく、新たな言葉を自ら生み出すことでもあるのだということイシガは体現して見せた。このような営為はイシガのそれまでの命を賭しての言葉への取り組みによって、自然と生み出されたものであろう。

また、兵役拒否を通じて人間の不完全さを身を以て知ったイシガは、平和的手段のための内戦も、単なるヒューマニズムに立脚するかつてのW. R. I. の主張も肯定できないとし、「神よりあたえられる平和」を「最高の平和」だと考えるという自らの立ち位置を発信し続けた。⁽³²⁾

キリスト教エスペランティストとして戦時下を生き延び、「平和」を問い続けたイシガの生きざまは、エスペランティストの使命とは、単にエスペラントを学び使用することだけではなく、ザメンホフの志をさらに発展させ、自分が考える「平和」を守るためにできることを考え、なおかつそれを実行することであるということを生き生きと伝えている。エスペラントの可能性とは、このような主体的かつ創造的な個を育みうる点に見出せるのではないだろうか。

新たな戦争の世紀に突入し、人類の終末時計は残りわずかだと言われる現在、人間の不完全さ、弱さを認識し、それでも人間が持つ言葉の可能性に賭け続けたイシガの抗いと平和実践を振り返ることは決して無意味ではあるまい。

《注》

1. 「ICJの命令 提訴の南ア評価」（『朝日新聞』2024. 1. 27）を参照した。
2. 「ナロード」（народ）とは、国民、民族、民衆などを意味する多義的なロシア語であり、血縁的な集団というニュアンスが強い。（改訂新版 世界大百科事典を参照。）
3. 「ウクライナ侵略、文化人の出国相次ぐロシアを日本の「反面教師」に…東京外語大・沼野恭子教授」（読売新聞オンライン2023. 3. 5 <https://www.yomiuri.co.jp/world/20230303-OYT1T50100/> 最終アクセス2024. 2. 9）
4. 深申徹「中国の台湾研究者による台湾政策論（2000-2022）「話語権」をめぐる議論に着目して」（『アジア研究』J-STAGE 早期公開2024. 1. 18 最終アクセス2024. 2. 9）
5. 「言語戦争」とは、公用語をめぐる異なる言語共同体の対立であり、時に実力行使に至る。19世紀にオランダより独立したベルギー王国における、使用言語の差による南北の対立（フランドレン問題）がベルギーの「言語戦争」としてよく知られている。（『世界史の窓』https://www.y-history.net/appendix/wh1701-044_8.htmlを参照、最終ア

セス 2024. 2. 9)

6. 一般財団法人日本エスペラント協会 HP「エスペラントとは一創案者ザメンホフ編」(<https://www.jei.or.jp/zamenhof/> 最終アクセス 2024. 2. 9) を参照した。
7. ワールド・ファミリー バイリンガル サイエンス研究所 HP「人工的な国際共通語「エスペラント」」(bilingscience.com 最終アクセス 2024. 2. 9) によると、現在のエスペラント話者人口についての公的な調査は行われたことはないが、Facebook の公開情報などから類推すると 2019 年の段階ではエスペラント話者人口は全世界で約 200 万人であり、そのほとんどが第二言語としての使用であるという。
8. 三宅史平「新体制への出発 IEL 離脱の意義」(『エスペラント La Revuo Orienta』1940. 10)
9. 本稿では、イシガ自身が日記の抜き書きをまとめ周囲に配布した『Heiwa o motomete』(1970. 8 ガリ版刷) および『神の平和一兵役拒否をこえて一』(1971. 6 新教出版社) を「日記」として参照している。後者(『神の平和一兵役拒否をこえて一』)の「まえがき」には、「へたなひとつの解答でも、あるひとりの人のために役立つことがあるならば」と「ひとには読めない自己流の速記記号を文字にもどし」たと記されている。
10. イシガ オサム「神を信じて生きるよろこびについて」(『資料 戦時下無教会主義者の証言』キリスト教夜間講座出版部 1973)
11. 注 10 に同じ
12. 前掲書『神の平和一兵役拒否をこえて一』(1971. 6 新教出版社)
13. 注 10 に同じ
14. 江端典典『内村鑑三とその系譜』(日本経済評論社 2006. 11) を参照した。
15. 『労働時報』(1933. 1) および「東亜時局研究会趣旨」(『国策研究』第 9 輯 1939) を参照した。
16. 佐藤卓己「世論とメディアによる戦意昂揚」(『日本人はなぜ戦争へと向かったのか』NHK スペシャル取材班編著 新潮文庫 2015) を参照した。
17. 注 10 に同じ
18. 原文は次のとおりである。
“Milito estas krimo kontraŭ la homaro. Ni, do, firme decides ne subteni ian ajn militon, sed penadi forigi ĉiajn kaŭzojn de milito”
19. 藤野豊「賀川豊彦と「救癩」運動—日本 MTL・楓十字会・日本救癩協会の運動と論理」(賀川豊彦記念松沢資料館編『日本キリスト教史における賀川豊彦—その思想と実践』2011 新教出版社 530 頁)、およびジョン・ヂヤックソン『メリー・リード：癩に罹り癩に奉仕した婦人の生涯』(今井よね訳 日本 MTL 1934 212~213 頁) によると、日本 MLT (Mission to Lepers) とは、1925 (大正一四) 年に組織された団体である。ハンセン病は遺伝病ではなく単なる伝染病であることを宣伝し、隔離療養事業を促進し、患者にキリストの福音を伝え、彼らの生活を慰安し希望を与えることを目的とした。
20. 注 10 に同じ
21. MEMORANDO pri Militrezistado kaj Esperanto によると、W. R. I. への参加者の政治的立場や宗教は多様であり、社会主義者とアナキストが、リバタリアンや政治に関心を持たない同志と協力し、また、敬虔なカトリック教徒、プロテスタント教徒、トルストイアン、ヘブ

ライ教徒, ヒンズー教徒, イスラム教徒などが人類の連帯と生命の神聖さへの信念のもとに統一されていたという。

参照した原文は以下のとおりである。

Ĝiaj sektioj estas tute aŭtonomiaj en sia laboro. La anoj estas tre malsamaj laŭ individual kredoj religiaj, kaj politikaj.

En la W. R. I. socialistoj kaj anarhistoj kunlaboras kun liberuloj kaj nepolitikaj kamaradoj ; liberpensuloj kun piaj katolikoj, protestantoj, tolstojanoj, hebreeoj, hinduoj kaj mahometanoj.

22. LA VINBERUBRANĈO (1936年1月号)「HEJMA PAĜO」
23. 8章の原文タイトルは以下のとおりである。
“VIII. The language of Christianity First international tongues—Koiné—importance of Greek for Christianity—spread of Greek—Greek in the Diaspora—in Palestine—Language of Jesus—The Latin West”
24. 「日章旗がひるがえり、親日気分が横溢した」揚子江沿岸の都市の様子 (1939. 7), 絵葉書 (1939. 10), 「召集以来一年を経過しました。全く夢の様です。目下各地の残敵を殲滅し〇〇にて附近の警備に任じて居ります」(1940. 1) などの真壁からの報告がみられる。
25. 後藤齊, 前掲書, 123頁
26. 同上, 124頁
27. 前掲書『神の平和—兵役拒否をこえて—』192頁には以下のような叙述がある。
「同じ言語運動に関係して、わたしは特高の取調べだけですんだのに、かれのほうはヤマガタまで引っぱられ一年も拘置される災厄にあった、そのかれへの負い目のようなものがわたしの今度の行動の裏に動いていなかったとは言えなかった。」
28. 注10に同じ
29. イシガ・オサム「神の平和」(『独立』1949. 7)
30. イシガ・オサム『小・生・書』(NES刊 1985. 8)を参照した。
31. 前掲書『神の平和—兵役拒否をこえて—』の1941(昭和一六)年12月25日の日記には以下のように記されている。
「わたしはキリスト教を信じているかどうか知らない。しかし、わたしはキリストなるイエスを信じている。ただ信じている。信頼すべき人として信じている。したうべき人として信じている。うやまうべき人として信じている。模範とすべき人として信じている。師として信じている。また、主として信じようとしている。」
32. イシガ・オサム「平和の論 平和の生」(『独立』1950. 8~9)などを指す。

【附記】

本稿は、17th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS) での口頭発表 (19th August 2023, Ghent University) に加筆・訂正を加えたものである。